

米国地質調査所ナショナルセンター見聞記①

盛谷智之(海洋地質部)

はじめに

ちょうどこの原稿を書いている今日 1979年3月3日は米国地質調査所(USGS)の創立百周年に当たる。

バージニア州レストンにある USGS ナショナルセンター(本部)では 3月2日と3日に盛大な百年祭祝賀式典や庁舎公開などの記念行事が催されているはずである。また 記念行事は両日にとどまらず 1978年から1979年にかけてさまざまなものが企画されている。例えば 展示会 地学視聴覚教材の作成 標語入特別郵便消印 講演会 国内・国際シンポジウム 広報(資料入り紙ばさみ 出版物・地図・便せん・写し絵などへの標語の使用ポスター) 年報百周年号その他の特別出版物 など盛りだくさんである。ちなみに標語は“**One Hundred Years of Earth Science in the Public Service**”(公共のための地球科学の百年)である。

このような百年祭行事がレストンのナショナルセンターを中心にくり広げられていることは意義深い。なぜなら USGS の本部は 1879年の創立以後の発展につれワシントン地区の各所に庁舎が分散する結果となっていたが 6年前の1973年にワシントン首都圏域の一角レストンに念願のナショナルセンター新庁舎が完成 本部の統合移転が実現し これによって百周年後に向けての USGS の地球科学分野での諸活動の基礎が確立されたからである。このナショナルセンターの実現こそ百周年を迎える USGS の記念すべき大事業であったといえよう。

ひるがえってわが地質調査所も USGS とほぼ同年代の1882年2月13日に創立され 幾多の変遷をへて 本1979年秋には 筑波研究学園都市の新庁舎への統合移転が完了する予定であり また3年後の1982年には創立百周年を迎えようとしている。巨大な組織の USGS とはその規模においては比すべくもないが わが地質調査所もその研究所の歴史の大きな節目の時期にあると感じずにはいられない。

さて筆者は1977年10月 米国で開かれた日米天然資源会議の海洋資源工学調整委員会第6回日米合同会議(10月20日 カリフォルニア州ロサンゼルス) および海底地質専

門部会第4回日米合同会議(10月21日 カリフォルニア州メンロパーク)に出席したさい レストンの USGS ナショナルセンターを視察する機会をもつことができた。約3日間の短い訪問であったが 業務活動の全般についてひと通り見せてもらい とくに新庁舎の設計の特徴や移転時の留意点など われわれの筑波移転にとって参考となりそうなことを教えてもらうよう努めた。

この視察結果は 速やかにまとめ筑波移転計画への何らかの参考資料となればと思いつつながら 業務の多忙にさまたげられ 遂に今日までのびのびになってしまった。

間もなく4月には先行移転もはじまろうかという時期になり 遅きに失した感があるが 地質ニュース編集者への投稿の約束をこれ以上のばすことはできない羽目になり 取り急ぎまとまりのない形となることを覚悟の上記事にすることにした。さらに短期間に垣間見たにすぎないので いろいろ間違っ理解もあるかもしれないことをおこわりしておく。なお 上記の日米天然資源会議関連の会議については 地質ニュース No. 286(1978-6)に報告してある。また USGS ナショナルセンターの簡単な紹介は すでに長谷紘和氏が 地質ニュース No. 259(1976-3)で行っている。

レストンの新庁舎は精神病院用建物?

1977年10月20日夕刻 ロサンゼルスでの日米天然資源会議海洋工学調整委員会の会議を終え 私は海底地質専門部会の米側部会長の Parke D. SNAVELY Jr. および事務局幹事の Theodore T. SUMIDA の両氏(いずれもUSGS メンロパーク地域センター) と飛行機で約1時間かかるメンロパーク近くのサンホセ空港に向かった。その間向かい合わせの席で雑談しながら私は SNAVELY 氏あるいは SUMIDA 氏も旺盛な茶目気精神の持主であることを発見した。彼等の並びの席に1人の男が掛けていたが飲みかけのアルコールの小ビンとグラスを置台に 週刊紙を座席にそれぞれ置いてトイレに立った。途端に2人はいたずらっぽく目を見合わせ その小ビンとグラスを空いた座席に移しその上を週刊誌で覆いかくしてしまったのである。やがてかの男が戻ると 小ビンとグラスが無くなっているのに気づき どうなったのかわから

ないという不思議さと不安さの入りまじった表情となり遂にはスチュワードズを呼びに行こうとした。その瞬間にそれまで愉快そうに目を輝かして男を観察していた2人は週刊紙をさっと取り上げた。男は2人のいたずらに引っ掛かったことを知り苦笑し皆さんも笑って一件は落着いたのである。実はこれより前に私自身も SNAVELY 氏の冗談に一杯食わされていたことを知ったばかりだった。1974年にやはり米国で開催された海底地質専門部会第3回日米合同会議のさいシアトルから南へ西海岸の地質巡検を SNAVELY 氏の案内で行ったことである。日本海沿岸や伊豆半島西海岸などグリーンタフ地域の地形に似たオレゴン海岸の環状岩脈のみられる景勝地のある別荘の1つの側を通ったとき「これは自分のもので夏にはよく利用する」と彼はいった。早口の彼の英語を聴きとることに精一杯でその内容の判断までは余裕のない私の貧弱な語学力のためいわれる通りに信じ込んでしまった。そこで3年後の会議で再会し何かの折私が SNAVELY 氏にオレゴンの別荘はどうなっているかと尋ねると彼はびっくりしたように「オーノーあれは冗談だ。自分はその場所に別荘がもてるほど金持ではない。とんでもない」と答えたのである。

このようなことから SNAVELY 氏との会話では彼独自のユーモアを解する必要ありとやっと分かってきた。ところがそう自覚した後にもたもたである。彼は大真面目な顔をして私にいった。「レストンの USGS ナショナルセンターの庁舎はもともと精神病院用の建物としてつくられたが精神病患者を収容するにはあまりにも悪影響があると予想されたので政府に売り渡されそれを USGS がもらい受けることになったものだ。とにかくレストンでの視察の世話は副部会長の Gilbert CORWIN 氏に頼んだので良く見て来なさい」。彼のあまりの大真面目さにまたも私は半信半疑ながら全くの冗談だと否定し切れないう程であった。勿論後で述べるようにレストンの新庁舎は USGS そのものの建物として構想をねってつくられたのである。しかし彼の冗談の中で精神病院という言葉で表現された建物の設計の特異性に起因するクレージーな面も確かに若干認められなくもないことが分かったのである。

旅の盗難ご用心

さてレストンの USGS 本部の見聞という本題とは直接には関係しないがレストンに向かう直前にメンロパークで予想だにしないハプニングに私が遭遇したことをご参考までに述べておこう。

10月21日 メンロパークの USGS 太平洋北極海海洋地質課会議室で開かれた海底地質専門部会第4回日米合同会議は米側出席者は SNAVELY 部会長以下各地から集まった委員・顧問・オブザーバー計9名の多きに及び日本側は委員は筆者だけであったが幸い在外研究員として滞米中の地質調査所職員3名にオブザーバーとして加わってもらい盛会のうちに終わることができた。滞米中の3名は三村弘二(地質部 在 USGS) 衣笠善博(環境地質部 在 USGS) および伊藤久男(地殻熱部 在スタンフォード大学)の各氏でそのうち三村氏は帰国前衣笠氏は渡米後間もないときであった。会議後われわれは SNAVELY 氏宅でのディナー・パーティに招かれ夫人の素晴らしい料理のもてなしを受けた。そこを辞したのはすでに10時半を過ぎそれからさらに三村氏のアパートに立寄り家族の方友人を含め日本人同志の歓談となり時のたつのを忘れる程であった。伊藤氏の車で送ってもらいホテルに帰ったのは午前1時を過ぎていた。

会議を終えた安堵感とパーティや歓談後の快感が吹っ飛んだのは私の部屋のドアを開けた途端である。やられた! 部屋に衣服や書類が散乱スーツケースやバッグさらには備えつけの大型テレビまで壁面の線から切り離され無くなっていたのである。至急連絡されたしとのメモがありフロントに私が帰ったことを告げると夜警のボーイが直ぐ来て状況を説明してくれた。私の留守中に泥棒は便所の小窓を開けて侵入ドアから堂々と物を持ち出し車で去ったらしい。テレビを盗むとフロントの警報ベルが鳴るようになっておりそれで事件の発生を知ったそして警察にも連絡すでに一度は調べに来たとのことであった。旅先しかも慣れぬ外国での盗難で困りはてともかく三村氏に電話したところ先程まで一緒だった人達全員が駆けつけてくれた。幸いその中に二世のユーコさんという方が居て応急の処置についていろいろ助けてもらうことができた。彼女の助言で警官にもう一度来てもらい盗難品と価格のリストの調書を作成してもらった。また問題の小窓は私は閉まっているものと思い最初からタッチしてなく窓をしめようとしてみるとペンキが厚く塗ってありロックできずもともと不完全な状態であった可能性がありホテル側の管理の責任も考えられた。これを警察からホテル側に立証してほしいとのこちら側の要求に警官はそのようなことには関知しないので管理人に直接掛け合してほしいとの返事でまたホテルの夜警ボーイも責任あることはいえないので明朝管理人が来てから話してほしいただこの1階のルームは危険なので2階の

別のルームの用意はしますということになった。

このホテルでの宿泊は私にとって3回目であり 盗難のおそれは思いもつかぬことであった。命に別状がなく 旅券・航空券・小切手・現金は身につけ盗まれなかったのは不幸中の幸いであった。痛手はとくにレストンに備えて準備して持参したアサヒペンタックスと標準・広角用交換レンズ ローライ35S ストロボなどカメラ類全部を貴重な撮影フィルムごと失ったことである。これらは携帯バッグに入れたり 1部はテーブルの上に出して置いたものである。後でホテルの部屋に貴重品を置くのは危いと注意された。またスーツケースなどは普通は持ち去らないものだそうである。中には地図や資料 下着など金目のものは入れてなかったが キーを掛けておいたのだから丸ごとやられたのであろう。これに反してクローゼットのハンガーに掛けてあった背広 パジャマ テーブル上の書類などは無事であった。またこういう事態では当然警察の世話になることになるが 全面的信頼というわけにはいかぬようである。深夜に調べに来てくれた黒人の若い警官は 調書作成のための応答で精神的余裕のなかった私を除き他の男性諸氏には胸のふくらみからチャーミングな女性だと見破られたようだったが 二世のユーコさんがいったとおり折角調書らしいものを作成したのに 署に帰ってから報告は省略したのではないかと翌日になって分かったのである。

このようなハプニングはあったものの 幸い関係者の皆さんの助けによって 翌日22日からの私のスケジュールは予定通り続けることができた。警察およびホテル管理人との交渉 処理はUSGSの二世のSUMIDA氏に依頼 買物の時間がないためユーコさんに身廻品 下着など見ため取り揃えてもらい 旅行バッグは衣笠氏に借りカメラは三村氏のキャノンデートを日本に帰るまで借りることになった。またSUMIDA氏による警察との交渉から 付近のゴミ置場に盗品の一部が捨てられていたことがわかり レストンでの交換資料として持参した地調出版物 会議資料 身廻品の一部などが返ってきたのも救いであった。しかし ホテル側あるいは保険会社への責任補償の交渉は結局うまくいかなかったようである。

ともかく 22日のモンテレー半島への地質見学 同夜の日本側招待ディナーを済ませ 23日には伊藤・衣笠両氏にサンフランシスコまで車で送ってもらい 夕方には2人と別かれ市内のホテルで1人となり レストンへの旅に備え連日の疲れをとるため早々と深い眠りについたのである。

ナショナルセンターのびっしりの見学スケジュール

10月24日朝サンフランシスコ空港をTWA機で出発 途中4時間15分の飛行中は メンロパークでの盗難のショックが完全にはいやされぬ消耗した気分をめいりがちであった。夕方バージニア州レストン西方のダレス国際空港に到着した。ところが空港に出迎えにみえたのは予定された副会長の Gilbert CORWIN 氏ではなく 同じ海洋地質部の Joshua I. TRACEY, Jr. 氏であった。そして CORWIN 氏が3日間に心臓発作で倒れ入院 少なくとも2週間は退院できなくなり このようなことで私の見学スケジュールもまだ出来ていない しかしTRACEY氏が適当な人達を選んで手配するからとの説明を受けた。またも予想しなかったハプニングであったが すべてTRACEY氏におまかせすることで 同夜は空港に近い Sheraton ホテルに落着いた。

翌25日早朝 TRACEY氏の車に同乗していよいよ USGS ナショナルセンターに向かった。車で5分程の近さで 8時には到着した。ちょうどサマータイム(Daylight saving time)が来週終るという時期で 朝は薄暗いときから来ているという感じである。USGSの勤務時間は9時までに来て8時間働けば良く したがって6時半頃来れば早く帰ってかまわない。実際午後3時頃にはもう帰りは始める人も居るようであった。さて 私の見学の希望として

- ① USGSの業務活動全体の概要
- ② その中でとくに海洋地質部の活動
- ③ 新庁舎のデザイン とくに実験室システム・岩石試料の保管・図書館について
- ④ 移転時の注意事項

などをTRACEY氏にお願いし これに対して25・26・27日の3日間のびっしり内容のあるスケジュールをつくっていただいた。各部門で多忙な中を会って下さり また説明や案内をして下さった方々は次のようであった (敬称略 組織図順)。

所長室

W. A. SCHMIDT (施設特別アシスタント)
Robert E. ROGERS

土地情報解析総室

James R. BALSLEY, Jr. (室長)

測地総部

Charles E. MORRISON (国際調整部)
John D. McLAURIN (計画開発部)

地質総部

Dallas L. PRICK (部長)

- E. H. ROSEBOOM, Jr. (東部地域部長)
- Barbara A. CHAPPELL (科学出版部 図書館 司書)
- William CANNON (鉱物資源部東部鉱物資源課 Geologist)
- David F. DAVIDSON (海外地質部中東アジア地質課長)
- Maurice J. TERMAN (環境地質部東部環境地質課 Geologist)
- Paul B. BARTON (地球化学地球物理部 実験地球化学鉱物課 Geologist)
- Robert L. SMITH (// 野外地球化学岩石課 Geologist)
- Marcia F. NEWELL (// 同位体地質課 Geologist)
- Mickel FLEISHER (// 広域地球化学課 Chemist)
- Brent P. FABBİ (// 化学分析課長)
- Harry J. ROSE (// 化学分析課 Chemist)
- Charles S. ANNELL (// " Spectrographer)
- Frank G. WALTHALL (// " Chemist)
- Father FLANAGAN (// " Chemist)
- N. Terence EDGER (海洋地質部長補佐)
- Joshua I. TRACEY, Jr. (海洋地質部 Geologist)
- Robert ROLLAND (// Geologist)

水資源総部

- O. Milton HACKETT (副部長)
- James R. JONES (海外部長)
- Robert M. BEALL (Hydrologist)
- 四倉信弘 (Research Hydrologist)
- Bruice B. HANSHAW (Geochemist / Hydrologist)

資源保全総部

- James N. PERRISH (海洋資源評価課長)

出版総部

- Robert E. JAMES Jr.

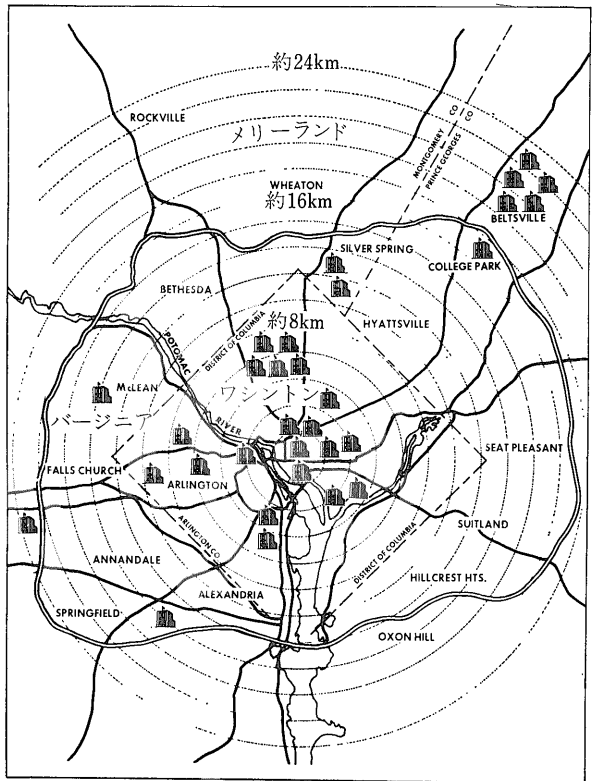
スケジュールにはまた 10月26日午後8時からワシントンの John Wesley Powell 講堂で開かれたワシントン地質学会の第1027回例会への出席も組み込まれ 地質総部長の Dallas PECK 氏の車に乗せていただくことになった。このように USGS ナショナルセンターの近況について多くを見聞することができたが ここでは新庁舎と移転の話を中心とし 業務活動の話は別の機会にゆずることにしたい。

長年の念願 統合移転

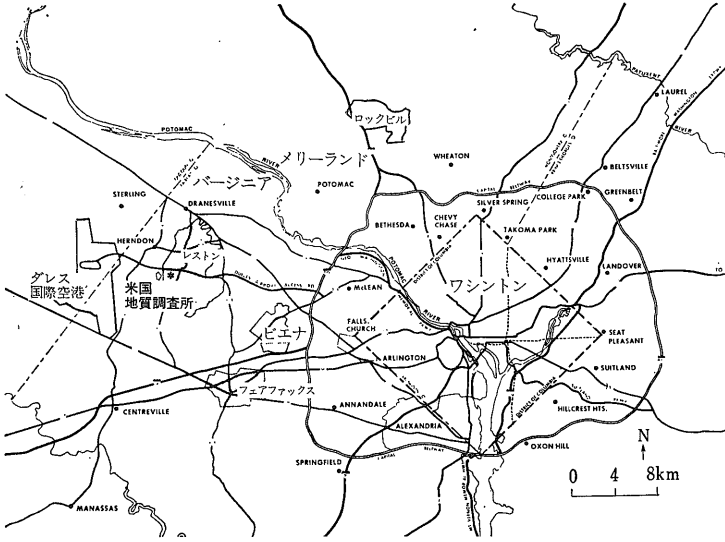
1973年8月に USGS 本部の第一陣が パージニア州レストンの新しく完成し USGS 第2代所長を記念して John Wesley Powell 連邦ビルと命名されたナショナルセンター新庁舎に移転した。USGS は1879年の創立以降拡大し続けてきたその計画 活動のため 増大する人員・設備を次々と各所のビルに収容しなければならず

1960年までにワシントン首都圏の17か所に分散した実に30以上ものビルに分かれる結果となった(第1図)。このため新庁舎建設と統合移転は長年の念願であったのである。新庁舎建設構想は 第2次世界大戦直後から準備され 1956年には 議会がワシントン首都区内の連邦政府所有地に建設する案を可決した。しかしこれは適当な用地が得られず放棄された。その後再び提案されたのが今回実現した庁舎建設計画で これは1958—1959年に準備され 1962年に議会で認可 1964年に調査費がつき 1969年に建物設計が完成 さらに連邦政府の資金不足のため民間との賃借契約(リース)方式として最終的建設予算が認可され 1971年に建設契約が決定されたものである。この賃借方式とは 政府は土地だけ所有し(その半分も民間会社から寄付された) 建物は当初民間会社資金で建設し 政府が20年間賃借(リース)し その後に政府の所有となるといういわば分譲ビルである。

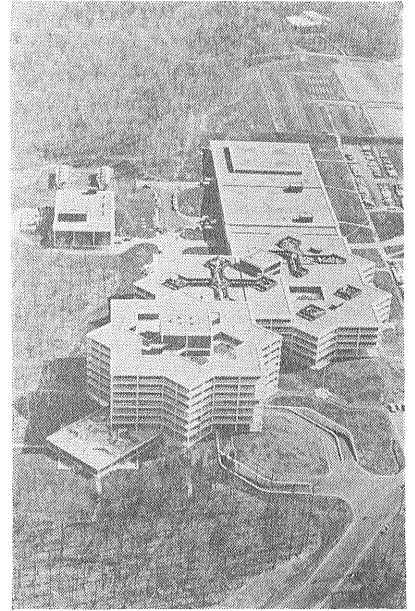
このようにして USGS はパージニア州レストンにナショナルセンターを完成させることで コロラド州デンバーとカリフォルニア州メンロパークの両地域センター 南ダコタ州スーフォールズの EROS データセンター。その他全米各地に所在する地方支所との有機的な関連をもつ全所的な組織としても整備されたのである。その



第1図 ワシントン首都圏における移転前の米国地質調査所 (USGS) の庁舎の分布図



第2図 ワシントン首都圏の道路図およびバージニア州レストンの米国地質調査所 (USGS) ナショナルセンター位置図



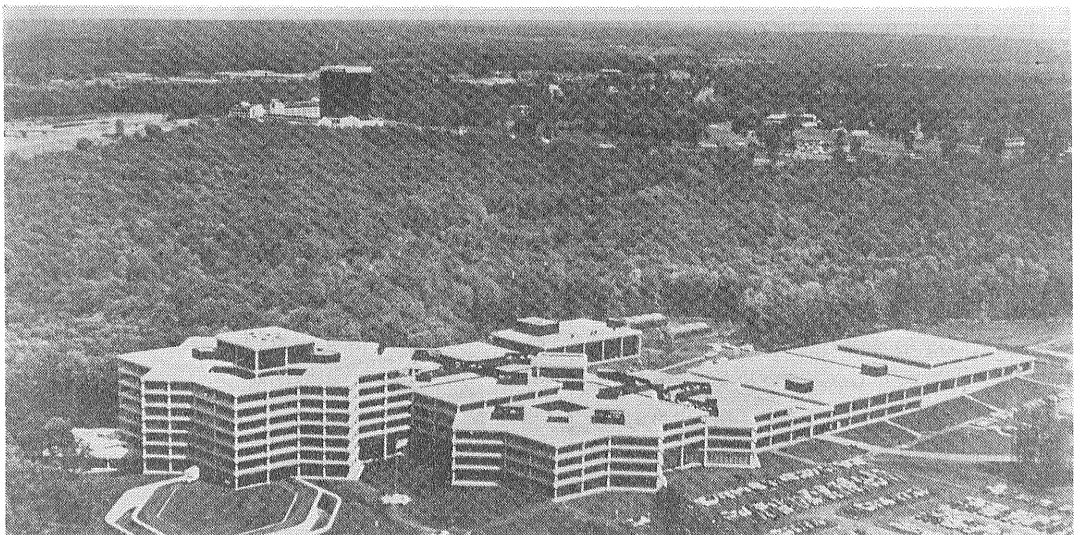
第3図b USGS ナショナルセンターの全景写真

組織は巨大で全職員数は 9,200名 そのうちレストンのナショナルセンターに勤務するものは2,200名である。

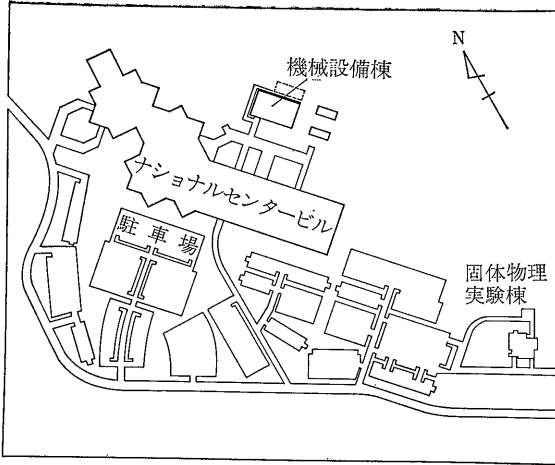
恵まれた自然環境のなか

USGS ナショナルセンターのあるレストンは 首都ワシントンから西方約30km の位置にあり またレストンの西方約 6km には10数年前にできたダレス国際空港がある (第2図)。 また空港の比較的近くに Sheraton Hotel がある。 このようにワシントンから USGS までかなり遠く 4車線のハイウェイを走って約1時間か

かる。 公共交通手段のない郊外のため通勤はもっぱら自家用車に頼らねばならない。 職員の多くはビエナとフェアファックスの東側の環状道路にそう地区に住み通勤しているとのことである。 ただレストンのUSGSとワシントンの内務省玄関口とを結ぶバス便が1時間おきにある。 一方 長所としては国際空港と立派なホテル (Sheraton) が近くにあることがあげられる。 レストン訪問のさいはこのホテルに宿泊することになるが 空港到着 出発時にはホテルの送迎バスを利用 (有料) できる。



第3図a USGSナショナルセンターの全景写真、一続きの建物が John Welsey Powell 連邦ビル 背後にあるのは機械設備棟

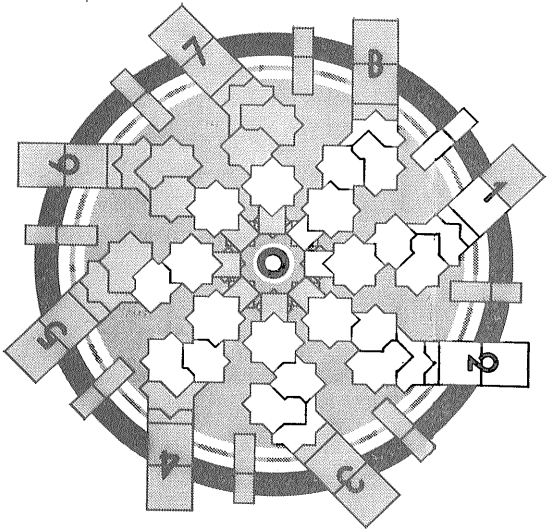


第4図 USGSナショナルセンターの建物・駐車場配置図

レストンは山麓氷河がつくったゆるくうねる丘陵地であり 森と湖の素晴らしい自然環境に恵まれている。そして大気汚染や震動などの発生を制限するなど 研究所立地を指向した町づくりが行われている。USGSの敷地約 0.42km² は森の中にあり 研究室の窓からの眺望はさながら静寂と紅葉の樹海のようなであった。自然との調和が見事に保たれているのである。用地付近の地質は中生代三畳紀の Manassa 砂岩からなり それに隣接して同じく三畳紀の輝緑岩 古生代下部の Wis-sahicken 片岩が分布する。

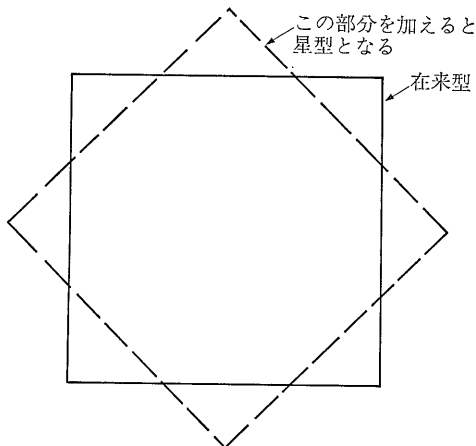
ユニークな星型ビルディング

ナショナルセンターを訪れると まずそのコンクリートの円柱と梁で組み立てられ全面が窓のような特異な外観の星型のビルが目に入る。正面に向かって左手

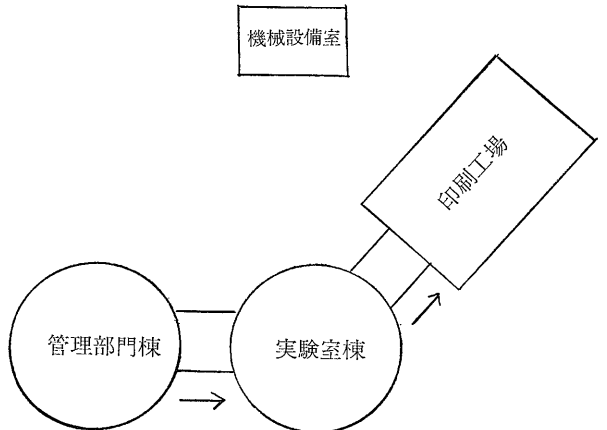


第5図 USGSナショナルセンター・ビルの各階の占有部分(白抜き)を示す模式図 Bは地階数字は1~7階をそれぞれ示す

(北)の7階建の高い星型棟から 右(南)側に 5階 4階 3階とより低い星型棟が次々と続き その先には低層の2階建棟が延び これらの一続きの長さは全長で 360m ある(第3図 第4図 第5図)。このような奇抜とも思える設計となった理由が面白い。設計に当たっての基本構想は 従来首都圏の33か所ものビルに分散していた不便さと キャンパス型では各部門のつながりが弱く別々になり易い傾向とを反省して 1か所集中型とすることであった。ところが職員の格に応じて窓の大きさをどの程度にするという政府の規則があり 本部には“偉い人”が多くいるため窓面積を多くとる必要があった。通常の正方形のビルではこの要求を満たすことができず



第6図 ビルの側(窓)面を多くとるために考えられた星形設計 2つの正方形を45°ずらして重ねるとできる(実際は一方の正方形がやや小さい)



第7図 USGSナショナルセンター・ビルの基本的構想の平面フロー図

建築家が考え出したその解決法が正方形の上にもう一つの正方形を重ね45°回転し星型とすることであった(第6図)。これによって16の側面をつくり出せ日照を十分に採ることができるからである。さてこれですべて良ければ申し分ないだが そうはならぬが世の常か 後で述べるように思いがけぬ問題が生じたのである。

その前に全体的な配置を見よう。用地0.42km²のうち駐車場には約半分の0.22km²(1,600台)が割り当てられ さすがゆったりしている。そして建物は横に長く続く複合型メインビル(Powell 連邦ビル)が大部分を占め 他に別棟としてその背後に集中冷暖房等の機械設備棟と やや離れて固体物理実験棟がある(第4図参照)。

複合型メインビルは基本的には第7図に示すような機能的流れを考えて設計されている。つまり左側の棟の部分に管理部門を 中央棟の部分に実験室をそれぞれ集中させ 右側にさらに工場部門を置き これらは各総部を収容する各階ごとに水平的に管理部門から実験室 さらには工場部門へとつながっている。また各総部の管理部門の居室(オフィス)は垂直的な流れによって最上階(7階)の所長室につながっている。一方 各総部によって必要とする実験室のスペースが異なるが 多いところはその分を各実験室階の部分で右側に延ばすようにし 建物全体では左から右に(方位では北から南へ)次第に高さが減小するよう配置してある。例えば地質総部のように 実験室スペースの多いところは比較的下の階に置き実験室部分を右(南)側に延ばしてある(第5

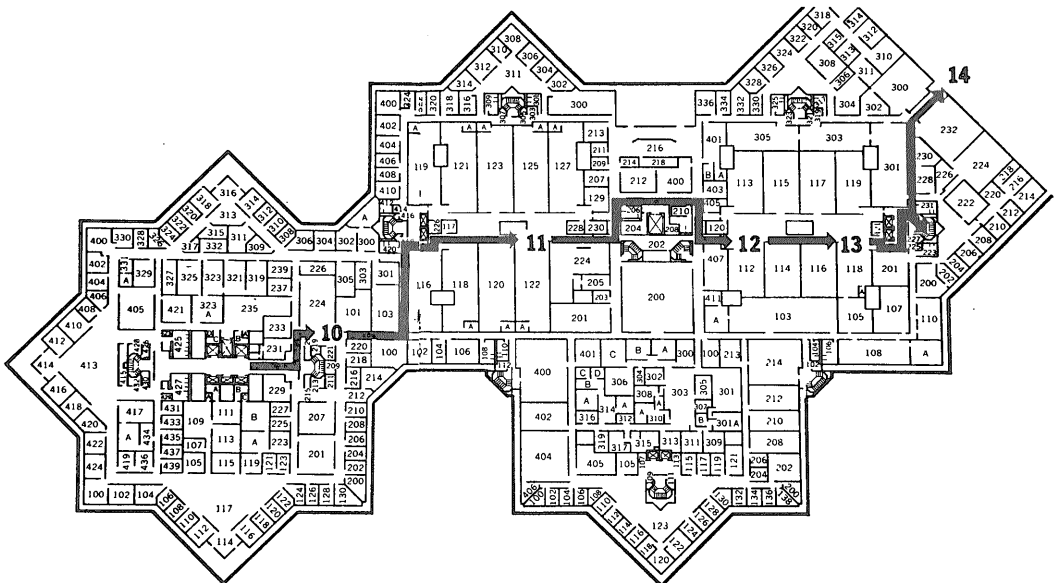
図参照)。

各階の主な配置を上から下への順に示してみよう。

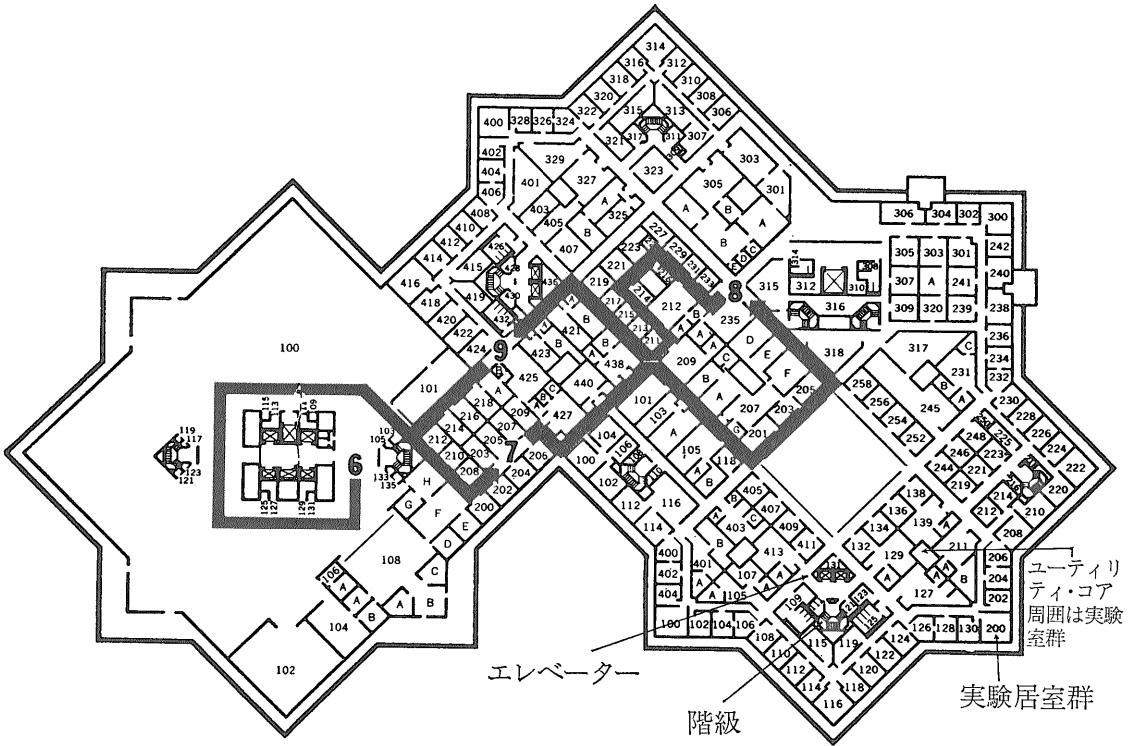
- 7階 所長室 資源保全総部
 - 6階 管理総部 出版総部 コンピューターセンター総部 水資源総部
 - 5階 水資源総部
 - 4階 図書館 地質総部
 - 3階 地質総部
 - 2階 測地総部 (地形図印刷工場)
 - 1階 ロビー 講堂 人事部 (工作 機器収納室)
 - 地階 カフェテリア 収納保管室
- ()は右側の2階建建物内にある。カフェテリアは600席あり地階といっても地上部分にあり 側面の窓から周辺の森の素晴らしい景色が眺められる。

建物のクレージーの正体みたり

次にいよいよ建物内部の見学に移るが その前に先ず内部配置の例として2階の測地総部(第8図)と3階の地質総部・図書館(第9図)のものをあげる。ご覧のように エレベーターや階段 そしてユーティリティ・コア(中央配管・配線部分)は勿論各階を通じ同じ位置にあり また 居室は外(窓)側に そして実験室等はコアを中心にして内側に置くという一般の原則はあるものの 部屋の高さや配列は全くさまざまである。測地総部



第8図 ビルの内部配置図の例 (2階の測地総部)。



第9図 ビルの内部配置図の例 (3階の地質総部と図書館)

(2階)と地質総部(3階)では全般的な配置方向が斜交したり根本的にちがっている。しかも地質総部のなかでも3階と4階では方向性は同じでも間取りは相当ちがってくるのである。これらの配置図を見ただけでも頭が混乱しそうだが 現実はずっと深刻である。各階でいざ部屋に番号を付けようとしたとき 非常に困ったそうである。何分星形の変則型である上 内部の部屋も大きさや配列がさまざまときているから 基準がとりこく番号付けは相当な難事であったにちがいない。ともかく関係者が知恵をしばって付けられたのであろうが わずか2 3日の訪問者にはきわめてわかりにくい部屋番号である。さらに問題は当然ながら各階の間での番号の共通性が全くないことである。自分がいま居る2階の204室の直上は304室であろうなどという単純な発想は通用しない。かくして訪問者はお手上げである。1人でマップなしで歩けば迷子になること受け合いである。1か所の見学が済めば その秘書嬢に次の見学先の部屋に案内してもらるか 電話を掛けて向こうから迎えに来てもらうほかはない。ところが迷子のおそれは訪問者に限らない。案内の秘書嬢でも自分の階ならともかく 別の階へとなると部厚い大判の所内電

話帳を持ち歩き あちこちの部屋の秘書嬢に“道”を尋ねながら目的地にたどりつくということになるのである。

ここで私をはじめにふれた SNAVELY 氏の「レストンの新庁舎は精神病院用の建物だ」という冗談の意味を知ったのである。確かにこの星形の建物は 画一性に慣れてきた私にとって あまりに多様性に富み むしろ混乱とさえみえ クレージーな面をもつように思えた。この多様性あるいはクレージーの原因は “偉い人” が多いため窓を多くとろうと星形の建物としたこと いわば所内連邦制とでもいうべき各総部の自主性・独立性の尊重 さらには研究の目的にかなった実験室あるいは居室とするため個々の研究者の意見の尊重 などにあるように思われる。したがってもし多少の不便さがあっても 人間性が尊重され 快適な環境で創造的な研究や仕事ができるという本来の目的にかなったものであればとやかくいう筋合いはない。実際ナショナルセンターに暮らす人たちは “地理”にも慣れ むしろその変化を楽しんでいる風にも私には感じられたのである。(つづく)